

# 新宿商人

新宿区商店会情報誌

〔 しんじゅくあきんど 〕

vol.20

[ 2021年9月号 ]

発行:新宿区文化観光産業部  
産業振興課

☎03-3344-0701

FAX:03-3344-0221

✉shoten-rece

@city.shinjuku.lg.jp



特集

Win-Winの連携が街を変える!

# 商店会コラボの 実践術。

商店会 × 大学・小学校・商店会



# Contents

【しんじゅくあきんど】  
新宿商人  
vol.20

※本誌の掲載内容は令和3年8月現在のものです。  
取材時は新型コロナウイルス感染症の予防に努め、写真撮影時は特別にマスクを外して行いました。

【特集】

## Win-Winの連携が街を変える!

# 商店会コラボの 実践術。

他団体や地域とコラボレーションすることで、商店会に新しい動きや活力が生まれます。  
そこで、今号ではコロナ禍でも取り組めるコラボ事例をご紹介します。  
「これまでと違ったことがしたい」「変化をもたらしたい」……。そうお考えの商店会は、ぜひご検討ください!

01 Introduction 「コラボレーションが商店会を変える!」

02 コラボ① 十二社商店親睦会 × 工学院大学

04 コラボ② 余丁町商店会 × 余丁町小学校

06 コラボ③ 北新宿四丁目商友会 × 北新宿四丁目親交会

08 新宿商人物語「つなぐ」  
哲学堂靴修理店

裏表紙 商店街 News  
[ 知っておきたい今秋のトピックス ]

### 連携することで 外部の視点を取り入れる

「私が接してきた商店会で共通していた課題は、周辺地域の他団体との交流や接点がほとんどないことでした」

そう語るのは、工学院大学情報学部学部長・システム数理学科教授の三木良雄さんだ。三木さんは、工学院大学の学生による地域交流グループ「まち開発プロジェクト」の顧問

で、複数の商店会と連携している。一つの商店会とコミュニケーションを重ねていく過程で、商店会の魅力とともに、孤独に気づいたという。「商店会の温かいコミュニケーションは、他では得難い魅力です。しかし、街の再開発が進み、昔からの街と新しい街とが混在し始めると外部交流は少なくなっていく。それも無理なことですが、商店会の活性化を考えると、異なる文化圏と交わることが大切です。街全体の未来を考えて外に目を向けている商店会の方々はいるので、そこで連携する外部の活動が不可欠であると考えました」

大切なのは、コラボレーションの協働。その理由は、「様々な面でコミュニケーションを促進するから」と言う。「他の団体や地域とコラボレーションすると、まず初めに相手に商店会の存在が認識され、改めて注目を集めるようになります。また、異なる世代との交流が生まれると、ITなどの新しい文化に触れる機会が増える。もう一つの副次的な効果として、

商店会内部の世代間交流も挙げられます。コラボレーション相手の提案さんがオンライン会議を開くことが可能になる。ジェネレーションギャップを乗り越え、コミュニケーションが活性化するのは、その結果内部外部を問わず関わった人に、商店会愛が育まれる。そんなケースをたくさん見てきました」

商店会や街を愛する仲間を増やすことで活路を見出せる。そのためにコラボレーションが有用となるわけである。もちろん、具体的なアクション内容も重要だ。特に、「発信」の分野でコラボレーションをすると良い、と三木さんはアドバイスする。「まずは商店会の存在を知ってもらうことが最優先となるでしょう。例えば「まち開発プロジェクト」

「では、ウェブ上での街や店の情報発信をお手伝いしています。それにより、地元住民の方はもちろん、遠く離れた街に住む方にも、商店会と周辺地域の重みのある歴史、文化的な面白さを伝えることができます。そして新しい客層や人と関わりが生まれ、次なるコラボレーションにもつながっていく可能性があります」

コラボレーションが描く好循環こそが、次の商店会一手だ。

Teacher



工学院大学  
情報学部学部長  
システム数理学科  
教授  
**三木良雄さん**  
1960年、大阪府出身。総合電機メーカーを経て、2015年4月より現職。2020年4月より、学生主体で活気あるまちづくりを目指す「まち開発プロジェクト」の顧問を務める

## Introduction

# コラボレーションが 商店会を変える!

三木さんが顧問を務める工学院大学の「まち開発プロジェクト」と元定商店会の初めてのミーティング。双方の意見をすり合わせ、目的を共有する大切な時間だ。商店会と学生によるコラボレーションは、地域ぐるみの人間関係の構築につながる



学生との生きた交流が  
商店会に活力を与える

昭和の頃は料亭が軒を連ねる花街として栄えた西新宿四丁目エリア。今もそぞろ歩きを楽しむ人こそいるものの、地域活性化とまでは至らない状況にあった。そんな中、平成28年にこの地の商店会・十二社商店親睦会が取り組み始めたのが、近隣にある工学院大学の学生とのコラボレーション。新宿区が窓口となり、両者を引き合わせたかたちだ。

「正直なところ、商店会のメンバーだけでは新しいアイデアがなかなか生まれません。学生さんとコラボレーションすることで、いろいろな刺激や新しいことが始まるのではないかと期待感がありました」

十二社商店親睦会会長の風間守さんは当時をそう振り返る。

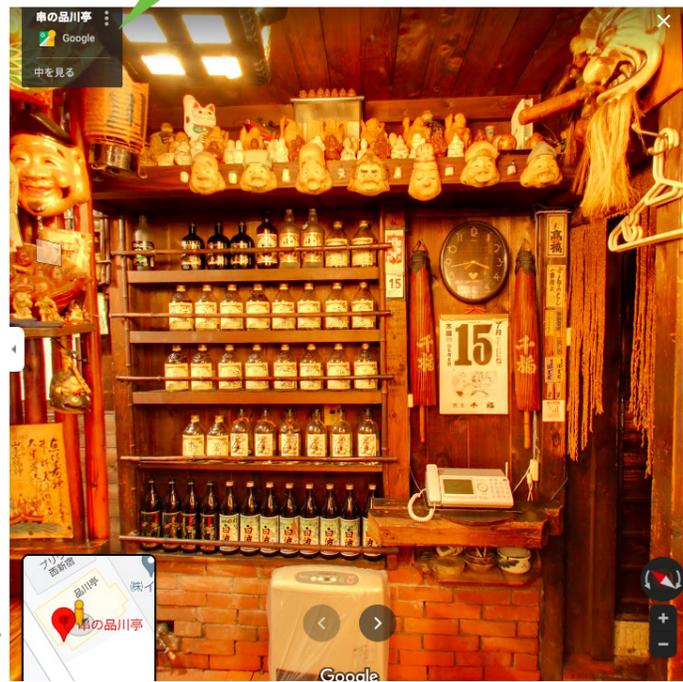
コラボレーションでは、工学院大学から情報学部学部長・システム数理学科教授の三木良雄さんが「CYBER十二社事業」の構想を提案。この事業は、VRコンテンツやARアプリの制作を主軸に、サイバー空間を活用して観光客の誘致および周辺地域への理解を深めてもらう、というもの。このアイデア自体もこれまでになく新鮮だったが、本質的な学びになったのは学生との交流自体にあった。

副会長の品川尚之さんは、「とにかく発想が柔軟で、全部が刺激的。例えば、インスタ映え」という観点から、長く住み続けている我々では気づかない、映える、スポットを教えてくれる。路地などにかつての街のにおいを発見して、高く評価してくれたのもうれしかったんです。それと、なんとかスマホをいじれるレベルの我々がLINEで連絡を取れるようになったのも大きな進歩でした(笑)」とそこで得た学びを語る。

デジタル関連の施策を行うことと並行して、学生たちは新宿十二社熊野神社例大祭をはじめとする行事やイベントにも参加し汗を流した。「お祭りの準備と後片付けは力仕事なので、学生さんたちの助けがあったかったです」と風間さん。

この学生グループは、のちに「まち開発プロジェクト」と名付けられた。現在メンバーの一人である学生永山勝也さんは、「商店会のみならずと交流を深めるにつれ、十二社にどんな愛着が湧き、西新宿を活性化したいという思いが強くなっていきました」と語る。顧問を務める三木さんも、「学生の強みであるテックノロジーから関わらせていただき、その過程で商店会のみならずが街について『本当はね……』ということを教えてくれる。学生にとっても人と人の生きた付き合いや街の文化

コラボでこんなことをしました!



## Win-Winの関係を構築! 学生が街に愛着を持ち 商店会も活動が活発化 両者の交流が 地域革新に

歴史ある商店会と、超高層ビルに入る大学。一見何の接点もないように思えるが、実は両者は相思相愛のコラボレーション相手。店主と大学生による交流が、街に活気をもたらしている。

Collaboration 1  
ARアプリ制作

飲食店のメニューを中心としたAR(拡張現実)コンテンツを制作。たとえば、居酒屋「品川亭」では、宗教上の理由やアレルギーで食べられない食材のある外国人観光客に向け、材料の説明が付いた多言語の拡張メニューが見られるアプリを公開。観光スポットへ案内する看板にも取り入れた

Collaboration 2  
お祭りに参加

学生メンバーが新宿十二社熊野神社例大祭に参加。本番の2日間のみならず、開催前日の準備と終了後の後片付けにも協力した。特に重量のある神輿の搬出には体力のある学生の力が活かされ、商店会のメンバーを喜ばせた。地域の人々との交流を深めた意義深い参加であった

Collaboration 3  
アイデアソン開催

アイデアとマラソンを組み合わせた造語である「アイデアソン」。十二社商店親睦会のメンバーが学生アイデアソンに参加し、多様な立場からアイデアを出し合った。その中から、インスタ映えポイントの周知、新宿十二社熊野神社例大祭にまつわる和装イベントの開催、AR/VRやプロジェクトマップの実現といったアイデアが生まれ、実り多き時間となった

Collaboration 4  
飲食店や見どころを  
Google MAPに

スマホ片手に街歩きをする観光客向けに、Googleマップで西新宿四丁目付近を中心とする便利なマイマップを作成。おすすめの飲食店やインスタ映えするビュースポット、すり鉢状の坂道といった土地の高低差の他に、かつて存在した十二社池などの場所も地点登録。ストリートビューを充実させるため、360度カメラで店舗内を撮影する他、GPSカメラも活用している



十二社商店親睦会副会長  
品川尚之さん

十二社商店親睦会会長  
風間守さん

工学院大学まち開発プロジェクト学生代表  
永山勝也さん

工学院大学まち開発プロジェクト顧問  
三木良雄さん

まとめ

- 街の文化を若い人に伝える。
- 継続的な関係性を構築。
- 商店会活動にIT技術を活用。





余丁町小学校の校門前にて、商店会が2020年度の卒業記念に寄贈した「余丁町笑顔プロジェクト」の巨大フラッグが掲示されている。一枚のフラッグに全児童分367枚のイラストが使用されており、伊藤さんのデザインによって美しいグラデーションとなって表現されているのが見どころだ



# その活動がファンをつくる！ 地域の小学生の 想いを載せた フラッグが 商店街に舞う

余丁町商店会では昨年、近隣の余丁町小学校の子どものイラストを余丁町通りに掲げるプロジェクトを実施。初のコラボレーションによって、コロナ禍でもたくさんの笑顔を生み出した。商店街という“場”があるからこそ、街のためにできることがある。そしてそれは、将来のファンづくりにもつながっていく。

## 子どもの笑顔が 商店会の未来をつくる

余丁町通りの路灯にはためく色とりどりのフラッグ。よく見てみると一枚に複数のイラストがプリントされており、それぞれに「コロナにまけるな」「笑顔の世界へもどそう」というキャッチフレーズが書かれている。子どもたちの明るさと自由な

発想力が伝わってくるイラストで、見る人に笑顔が生まれる……。令和2年8月上旬から12月末まで掲出されたこのフラッグは、余丁町商店会と余丁町小学校のコラボレーション「余丁町笑顔プロジェクト」によって作られたもの。発案者であり、余丁町で店舗ディスプレイを制作する「ハートランドプロジェクト」を営む伊藤博通さんは

「コロナにより、毎年たくさんの子どもたちが参加してくれる商店会主催の盆踊りや、地域のお祭りが中止になりました。学校のイベントも大半が延期・中止とのことで、夏の思い出づくりが何かできないかと考えたところ、子どもたちが描いたイラストをフラッグにして掲げるというアイデアが思い浮かびました」と発想のきっかけを語る。

商店会会長の志田清司さんも即賛同し、区の補助金の活用を決定。そして余丁町小学校の先生方に直接交渉した結果、商店会の伊藤さんらの提案は大歓迎され、余丁町商店会と余丁町小学校による初のコラボレーションプロジェクトが開始した。イラストのテーマは先生方とも相談し、小学1～3年生は「街の人が笑顔になれるもの」、4～6年生は「コロナ

対策啓発を主題にした。そうして子どもたちが描いた367枚のイラストを受け取った伊藤さんは、フラッグ32枚の両面にイラストを数枚ずつ配置して設置した。

「僕らの絵はこっち」「あれは私が描いたの」と大喜びでした。子どもたちが楽しんでくれたのはもちろん嬉しいのですが、その家族も商店街に来ることで商店会の認知度アップにつながったかなと思います」と志田さんは、反響の大きさを語る。伊藤さんも頷き「今後も子どもたちのコラボレーションを継続していきたいです。たとえばアートフェスティバルを開催して、今度は子どもたちの絵を道路の中央分離帯に掲げてみたいですね」と、コラボレーションがもたらす未来に思いを馳せる。



お二人に印象に残った作品を伺うと、伊藤さんは「夕陽を見つめる叙情的なイラストに『コロナと向き合おう』というコピーが添えられたもの」、志田さんは戦隊もののパロディである「ソーシャルディスタンスマン」と答えてくれた

このプロジェクトが成功した理由の一つは、商店会員が職住近接だということ。会員はほとんど町内会にも所属しており、余丁町小学校出身者も数多い。だからこそ地域との連携が深く、スピーディーに実行することができたのだ。そして、このよ

Voice  
ながよし  
**長葎真利子先生**  
(余丁町笑顔プロジェクト担当)

## 自分の絵が街に飾られて 子どもたちの思い出に

今まで、商店会の方々とコラボレーションをしたことはありませんでしたが、コロナ禍で学校行事が軒並み中止になってしまい、子どもたちの思い出づくりができない状況で、このお話はとても魅力的で、すぐにやらせていただくことになりました。子どもたちはそれぞれ一生懸命考えて、絵を描いていました。子どもならではのアイデアや真っ直ぐな気持ちが表現された作品ができあがったと思います。彼らはというと、自分の描いた絵が街に飾られ、とても誇らしげで。私も絵を見に商店街へ足を運びましたが、今回の取り組みも含めて、改めて商店会の方々の温かさを感じることができました。

## まとめ

- 子どもたちが喜び、地域全体に波及。
- コロナ禍でも取り組めることにチャレンジ!
- 商店会の認知度・イメージアップに。



# コロナ禍だからこそ一致団結！ 隣接商店会が ワンチームに。 発信で生まれた 新たな未来

北新宿四丁目にある大町通り。実は、ここには二つの商店会が存在する。高齢化やコロナ禍で活動が制限されるなか、「ピンチはチャンス!」と両会長がタッグを組んで動き出した。そこで見えてきたものとは――？



北新宿四丁目商店会  
佐藤繁己会長

北新宿四丁目親交会  
大内健嗣会長

株式会社ハイブリッジ  
コミュニケーション  
牧野尚司さん

## コロナ禍を逆手にとり コラボ事業にトライ

JR中央本線と神田川、小滝橋通りに囲まれた三角地帯の北新宿四丁目。その中央に位置するのが大町通りだ。一本の通りでありながら、ここには「北新宿四丁目商店会」(以下、

商店会)と「北新宿四丁目親交会」(以下、親交会)の二つの商店会がある。「まわりから見れば、商店会の境はよくわからないけど」と笑うのは商店会会長の佐藤繁己さん。「昔は互いに競い合っていて街を盛り上げていました。でも、これからは商店会同士、協力し合ったほうが良い。お客さんしてみれば違いはないんだから」と話すのは親交会会長の大内健嗣さんだ。

「どうしたものと悩んでいたときに、会員の中にプロがいることを思い出しました」(佐藤さん)。イベントの企画運営やセールス、ハイブリッジコミュニケーションの存在だ。相談を受けたプロデューサーの牧野尚司さんは快諾の上で、「どうせやるなら、隣の商店会と一

緒にやりませんか。そうすれば、大町通り一帯を盛り上げることができそうです」と提案。商店会の中では比較的新しいメンバーの牧野さんだからこそ、一消費者目線で提言できた。これに賛同した佐藤さんは、早速大内さんに声を掛けたところ、意気投合。ここに両商店会のコラボレーションが決定した。

「組織が一緒になるのは難しくて、補助金を活用したコラボレーション事業ならメリットがあるから反対者は出ない。コロナ禍で会員が集まらず、会長に一任されたことで話が進みました。こういうときでなければできなかったかもしれません」(大内さん)

## Collaboration 1 商店街マップと クーポン付スタンプラリー

商店会と親交会に所属する店舗を一覧にしたマップを作成。そこに200円分のクーポン券を1枚付けて、新聞折込として3000枚を配布。それを持って商店街で買い物をすれば、200円割引に。しかも、そこで新たにクーポン券1枚がもらえるので、その店以外で使うことができる。1カ月間の実施期間中、いろいろな店で何度でもクーポンを利用できるので集客につながる。



開催期間  
9/13~  
10/17  
※本報の掲載は  
次号終了します

## マイロード大町 ラリークーポン券

クーポン券(200円)をもらって別のお店でお買い物。そのお店でもクーポン券をもらって、また別のお店へ！クーポン券を使って、マイロード大町を楽しもう。



## Collaboration 2

### まとめて一つの YouTube チャンネル

区の「おもてなし店舗支援店舗事業補助金」を活用して、両商店会の会員を紹介する動画を制作し、「マイロード大町チャンネル」という名でYouTubeにアップ。さらに、商店街マップに動画サイトにリンクするQRコードを掲載した。動画制作をすることで、会員の意外な魅力も発見。会員同士のコミュニケーションにも役立っている。



## まとめ

- 消費者目線で企画する。
- 補助金なども有効活用!
- 会員のスキルを役立てる。

# つなぐ

## 哲学堂商栄会 哲学堂靴修理店

町の靴屋さんから、  
靴修理に特化した専門店への転身。  
そこに至るまでには並々ならぬ苦勞があった。  
そんな父の姿を見てきた息子は、  
一度は背を向けるものの、同じ道を歩む。  
二人で肩を並べて靴に向き合う、その想いとは――。



今や日本ではここにしか存在しないというイタリア製の機械もある。もちろんまだ現役。調子が悪くなると、機械好きの勝壽さんが器用に直す



父  
折田勝壽さん

子  
折田康之さん

### 父も子も家族のために 家業を継ぐことを決断

決して喜んで入った世界ではない。家族のため、そうすることが当然だったから。これが、折田勝壽・康之親子の共通する想いだ。

二人が営む「哲学堂靴修理店」は、靴職人だった勝壽さんの父が1945年に立ち上げた。当時は注文靴の時代。戦後復興期という時代の後押しもあって、職人を抱えるほど店は繁盛した。

それが一転、勝壽さんが9歳のときに父が急逝。しばらくは父の弟子が店を守ったが、勝壽さんが高校生になると店を畳むかどうかの岐路に立たされた。

「母親に『俺がやるから』と。16歳でした。ものをつくるのが好きだったから、見よう見まねで靴づくりを始めました」と勝壽さん。父の職人仲間が手助けしてくれたこともあり、持ち前の器用さで仕事をどんどん覚えていった。

だが、既製靴が世に出回るようになって、小さな店では食べていくのもやっと。そこで目を付けたのが靴の修理業だ。いくつもの小売店から靴を預かって修理し、できあがったものを届けるというも

の。月水金曜の週に三度、バイクで得意先を回る日々。1日約30軒、帰宅後は翌日の深夜まで修理を行い、次の日にそれらを配達する。その数、月に10000足余り。「休むのは元日だけ。でも、生活はカツカツで。息子は野球をやりたかったみたいだけれど、道具にお金がかかるからやらせてあげられなかった」

そんな父のもとで育った康之さんは、家業をどう思っていたのか。「子どもの頃から父に後を継げと言われ続けていたけど、その苦勞を見ていましたからね。やりたくなかった(笑)」

高校を卒業すると、情報処理関連の専門学校へ進学。しかし、就職活動では大手靴量販店も受け、最終的にはそこに就職することに。もし父に何かあったら、やはり自分が継がなくてはならないだろう。そのためにも同じ業界のほうがいい。心の奥深くには、そんな考えがあった。三人きょうだいの長男で、子どもの頃から弟や妹の面倒をよくみる、頼れる「お兄ちゃん」だった。だからこそ、就職して6年目、父から「戻ってこないか」と言われたとき、康之さんの心は揺らいだ。商売は多忙を極め、体の弱い母も深夜まで作業を

手伝っていたからだ。

「自分が後を継ぐことで家族の助けになれば」と思っていた。26歳でこの店に入りました」と康之さん。以来23年間、父の背中を追って腕を振るう。

「73歳の今もこうやって仕事をさせてもらえるのは康之のおかげ」と、勝壽さんが感謝の想いを口にすれば、康之さんは、

「父は人望が厚い人。店が大変だったときも、そのたびに人に助けられてここまでできた。それは本当にすごいこと」と父を讃える。お互い望んで入った世界とは言い難い。けれど今、親子で共に働ける幸せを実感する毎日だ。



婦人靴から高級紳士靴、スニーカーまで、修理技術の高さには定評がある。顧客からの相談に乗り、希望に合わせて修理するためピーターが多い



勝壽さんの父が元気だった頃、店内で撮った家族写真。手前左が勝壽さん、その隣に姉。奥に父と母。後ろには父が作った靴がずらり。大切な1枚はいつも財布に入れていた



哲学堂靴修理店  
新宿区西落合2-15-11  
03-3951-7667  
10:00~19:00  
休：日曜・祝日

2021  
Autumn

# 商店街 News

知っておきたい今秋のトピックス

## 商工業緊急資金(特例)の制度拡充を予定!

現在、開会中の新宿区議会第三回定例会において、商工業緊急資金(特例)の制度拡充に係る経費について、補正予算案を上程しています。  
概要については以下のとおりですが、詳細については議決後に区HP等でお知らせします。

**対象** 新型コロナウイルス感染症により  
事業活動に影響を受けている  
区内中小企業者

**内容** 商工業緊急資金(特例)をあっせんし、  
利子と信用保証料を区が全額補助

**貸付限度額** 最大1,000万円(貸付期間7年以内、据置期間12ヶ月以内)

**実施期間** 令和3年11月1日～  
令和4年3月31日(予定)

詳しくは  
こちらから

**お問い合わせ** 産業振興課  
**03-3344-0702**



これまで

貸付限度額  
**500**万円

貸付期間  
**5**年以内  
(据置期間6か月以内)

これから

貸付限度額  
**1000**万円

貸付期間  
**7**年以内  
(据置期間12か月以内)

現行の商工業緊急資金(特例)融資を受けている場合も  
借換融資や追加融資が可能!

## 支援策の補助対象期間が令和4年3月まで延長!

### おもてなし店舗支援 (感染拡大防止・業態転換・販売促進事業)

- 内容** 以下のような経費を区が  
最大10万円(10/10)補助
- 感染症拡大の防止対策にかかる費用
  - 新たに宅配・テイクアウト等を始めるためにかかる費用
  - チラシ作成など販売促進等にかかる費用

**お問い合わせ** 産業振興課  
**03-3344-0701**

詳しくはこちらから



### 新宿区店舗等家賃減額助成

**内容** テナントの家賃を減額した際に  
減額分の4分の3を助成

**お問い合わせ** 産業振興課・店舗等家賃減額助成担当  
**03-5273-3554**

詳しくは  
こちらから



### 専門家活用支援事業

**内容** 新型コロナウイルス感染症の影響から、  
事業再興に向けた事業計画の策定や  
コロナに関連する各種補助金申請において、  
専門家を活用した際にかかる費用を補助  
(10/10補助・上限額10万円)

**お問い合わせ** 産業振興課  
**03-3344-0701**

詳しくは  
こちらから

